

生成AIが変える医療の世界

第3回

私の生成AI活用法 (できていることできていないこと)

広島大学 放射線診断学 本田有紀子

はじめに

本稿は、2023年3月に、聖マリアンナ医科大学の小林泰之先生が主宰されている、MIRAI（医療人2030のEmpower 次世代医療を創る個別プログラム）2期生として私が参加して以来、先輩指導者としてお世話になっている、編者の本元先生からお話を頂いた。私は生成AIやITなどに精通など到底しておらず、私より適任の先生がたくさんいると数名のエキスパートを推薦し辞退しようとした。しかし、本元先生より本稿はこれから始める医療従事者にとって役立つ内容レベルがよい、ということだったので、日々試行錯誤しながら業務効率化の観点でどう使用しているかをお示しする。（私がChat GPTを使用するようになったのも、医療人2030に参加し、小林先生からまだ使っていないの？と何度も問いかけられたことによる）。

私は何においても着手するまでに時間がかかる性質である。当然、生成AIを使うのも知ってすぐとはいかなかったが、Chat GPTを使用するようになってから、まずは試しに相談し、仮のテー

マや仮の記載をしてもらうようになった。それに対しての同意と反論を手始めに行くと、スムーズにスタートが切れることが多く、業務着手までの躊躇している時間が短縮できている。

今回も、Chat GPTに「生成AIについて説明し原稿をどう作成したらいいか」、相談しながら書いている。

「生成AIとは、テキスト、画像、音声、コードなど、人間が作るコンテンツに似た新しい情報を自動的に生み出す人工知能である」

従来のAI（例：診断支援AI、リスク予測AIなど）は、主に「分類」や「予測」を得意としてきたが、生成AIはさらに一歩進み、新しい診療記録文、患者向け資料、画像診断の所見例などを“創造”できる点が特徴である。

医療の現場においては、

- ・ 診療録の作成
- ・ 患者への説明文書作成
- ・ 医学論文や教育資料の作成支援
- ・ 診断画像のレポート作成補助など、医師や看護師がこれまで手作業で行ってきた情報生成業務をサポートする技術として注目されている。

ただし、現時点では、

- ・ 誤情報（ハルシネーション）を生成するリスク
- ・ プライバシー保護とセキュリティの問題
- ・ 法的責任の所在の明確化など、慎重な運用が求められる課題も存在している。

太字がChat GPTの回答であり、うまいことまとめるなど感心する。しかし、本当の医療現場で使用すると素人には即実践できないハードルがあるのも事実である。

診療録の作成

とても有用な使用法だと思うが、私自身は未だできてはいない。臨床でも、誰かが生成AIを使用し作成したソフトを使えたらいいのと思っているが、現状は電子カルテ上でweb base で普段使っているChat GPTのような生成AIを使用できる環境に自施設ではいたっていない。学会では、慶応大の橋本正弘先生がすでに電子カルテ上で生成AIを活用し、書類作成補助を行っているのを拝聴し、流石だなと感心した。もうできているのだから、我々が使えるようになるのも時間の問題なのだと思う（また課金か…）。

マニュアル、患者への説明文書作成

マニュアル作成または、既知のものを変更する必要があるときの原案を作成するのに使用している（Chat GPTに相談しながら進める）。原案があると、各関係者が議論しやすいので早々に案を提出し議論の場にあげることによって、迅速に進められるようになったと思っている。マニュアル作成とは異なるが、「とっかかりがわからない仕事」でも威力を発揮する。どうしてもスタートの当初